

なほ

2月号
vol. 120

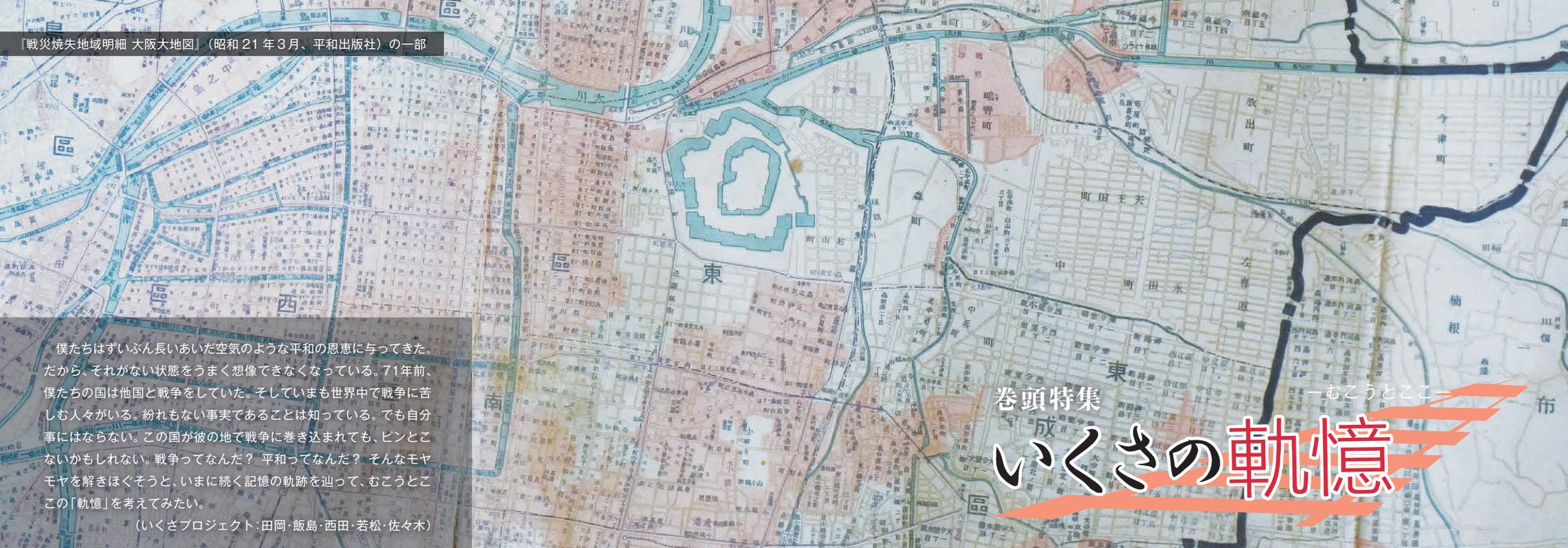


巻頭特集

いくさの軌憶

—むこうとここ—

「猫との遭遇」
花園南1丁目付近にて撮影



僕たちはずいぶん長いあいだ空気のような平和の恩恵に与ってきた。だから、それが無い状態をうまく想像できなくなっている。71年前、僕たちの国は他国と戦争をしていた。そしていまも世界中で戦争に苦しむ人々がいる。紛れもない事実であることは知っている。でも自分事にはならない。この国が彼の地で戦争に巻き込まれても、ピンとこないかもしれない。戦争ってなんだ？ 平和ってなんだ？ そんなモヤモヤを解きほくそうと、いまに続く記憶の軌跡を辿って、むこうとこの「軌憶」を考えてみたい。

（いくさプロジェクト：田岡・飯島・西田・若松・佐々木）

巻頭特集 いくさの軌憶

大阪市内編 その1 空襲を生きた少年の「軌憶」

空堀商店街



昭和20年3月13日から8月14日の5カ月間、米軍は大阪に計8回の戦略爆撃を行った。この大阪大空襲によってわたしたちの足元は一度、広大な焼土と化した。事実として知っていても、やはりにわかには信じがたい。今回、その出来事を体験した先人にお話をうかがうことができた。

空堀商店街で創業250余年の老舗饅頭専門店「丸与岡田商店」の店主を務めておられた岡田孝輔さん。昭和4年3月12日生まれ。満州事変を満2歳、日中戦争を満8歳で迎えた「戦中派」の世代である。

学徒動員されたのは中学三年生。久保田鉄工所（大正区恩加島）の工場で4気筒エンジンの排気集合管を作ることになった。学生も貴重な戦力とみなされ、工場技術者養成として昭和20年1月から今宮工業学校へ派遣され、わずかな期間で製図や旋盤などの工程を修めた。空襲は養成期間終了の直後であった。

大阪大空襲

3・13

空襲は3月13日の午後11時30分を過ぎた頃に始まったと記憶している。岡田少年は兄と家の屋根にのぼり、消火活動に備えていた。周囲に高い建物はなく見通しはよかった。最初に目にしたのは天王寺方面で焼夷カドが落ちていく光景だった。爆弾ではなく紙のようなものが落ちてきて、落下地点で火になって燃える。やがて火の手がバァッ

米国との戦争が はじまる

天王寺の中学校に通う岡田少年は、一年生の頃から『歩兵操典』で歩兵の基礎を学び、白兵戦や実弾射撃も訓練した（軍事教練）。「どこにも寄らずまっすぐ家へ帰れ」という訓示があった昭和16年12月8日、少年は道草で寄った天王寺の本屋「駈々堂」で「陸海軍、：戦闘状態に入った」というラジオ放送を聞き、訓示の意味を理解した。「あ、戦争や」。米国との交戦状態という緊迫した気分を直感した。

とあがる。いつの間にか、方々で焼夷弾が雨のように降り注いでいた。

長堀の高島屋が燃えていた。戦前の堺筋は銀座に倣って街がつけられていた。北浜に三越、平野町に白木屋、長堀に高島屋、日本橋に松坂屋。「百貨店通り」の通称どおり柳の並木が似合う華やかな街並みだった。それがいま、目の前で火の海と化している。

その頃、岡田少年は兄と二人で延焼を防ぐために火叩きを手にして消火に力を尽していた。「火叩き」とは竹に縄を括りつけ



「空襲を生きた少年」こと岡田孝輔さん

たものを水につけて使う消火道具である。地域の住民には、焼夷弾をこのような簡易な消火道具で叩き消すという程度の術しかなかった(図1)。焼夷弾(ナーム剤(石油ゼリー)を装填。図2参照)の消火はまさに「焼け石に水」。水をかけてもすぐに火が着いた。火叩きなどで対処できる代物ではなかったのである。

懸命の消火活動は朝4時まで続いた。

焼け野原を歩く

空襲が鎮まった朝5時30分ごろ、岡田少年は街を歩くことにした。自宅から松屋町筋を南下して天王寺動物園に突き当たると西へ折れ、恵美須町、日本橋



図1: ポスター「落下した焼夷弾の処理」(昭和13年)

三丁目から難波へ出て、大劇大阪劇場の通称、現・なんばオリエンタルホテル)のある南海通りを千日前通りへ向かったが、道頓堀には入れなかった。そこから東向きを変えて帰ってきた。焼け野原には本当に何も無い。恵美須町では焼け残った市電の「骸骨」をみた。「電車の骸骨なんて見たことない。電車も燃えるんやと思った。鉄の骨だけが残ってた」。見慣れたはずの場所に唯一残っていたコンクリート製の交番は、そこが道頓堀であることを告げていた。その付近で偶然、一人の同級生が茫然と立っているのを見つけた。「ど

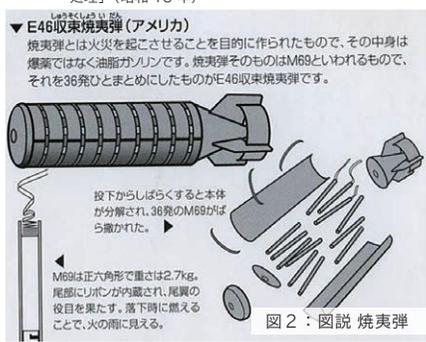


図2: 図説 焼夷弾

きた。そんな時代錯誤な物言いに、「何の仕事すんねん? 海軍は天皇陛下の統率のもとにあるんちがうんか。陛下がやめようというのに、お前ら背くんか」と言い返した。岡田少年はすでに戦争のない平和な日々を求めているのかもしれない。

占領期に 掴んだこと

その年の9月中頃に久保田鉄工所を辞めたものの次の用途は立っていないかった。連合国軍占領下でモノがないために家業も再開できない。何かしなければ生きていけない。そこで、中寺町の菩提寺の焼け跡で野菜を作る自給自足の生活が始まった。必要なものは何でも自分で調達して生計を立てる、というこの時期の生活が、現在に至るまで岡田さんの考えの根幹をなしている。

食料が安定的に供給され商売も公に再開できるようになったのは「統制解除」(※)された昭和24年だ、というのが岡田さんの認識である。この頃、岡田少年はすでに20歳の青年に成長していた。

いまに失われて いること

わたしたちはあえて尋ねてみた。「戦時と比較して、いまは平和といえませんか?」老舗を経営してきた岡田さんは角度を変えて「いま? いまはモノがあまりすぎるわ」と切り返した。もう一度、同じ質問をぶつけてみた。

——戦争のあった時代と今の時代に連続性はあるのでしょうか。岡田:「戦前・戦中」と戦後の昭和24年の「統制解除」までと、何でもある現代の三つ。戦前と戦中は比較的同じだった。空襲で

ないしたんや」と声をかけると「夜勤行っていま帰って来た」と応えた。「どないすんねん?」という言葉に、「いや、一応こういうことになったら、みな、いくたまさん(生国魂神社)へ行くことになってるんで、そこに行ってみるわ」と残してその場を離れた。同級生に会ったのはこれが最初だった。

一回目の空襲の後、米軍は「虎刈り一掃」(焼け残った街の再空襲)をチラシで宣告していた。6月になると宣告どおり再び空襲が始まった。空堀にも一発が長屋に落ちて2軒焼失している。焼夷弾の火を消すのは不可能にちかい。なんとか延焼を防ぐより他はない。住民総出の消火活動が功を奏し、被害は最小限で収まった。その後虎刈りの手は緩まない。史実によると、大阪の街は6月1、7、15、26日、7月10、24日、8月14日に空襲に遭った。それでも空堀は残った。

新聞が 知らせてくれた

最後の空襲の翌日、8月15日に昭和天皇による終戦の詔書が全国にラジオ放送された。しかし、岡田少年に終戦の事実を知らせたのは、よく聞き取れなかった玉音放送ではなく、勤務先の上司に買いに行かされた新聞であった。一面の見出しは終戦の旨を告げており、紙面をめくると広島島の写真があった。少年は「広島でこんなことがあったんやなあ。これがホンマなんやなあ。それで戦争を止めようと判断したんだなあ」と思った。「天皇と日本国は一体。国民一体で負けるときはみんなが死んだとき」と教えられてきた彼の心はどんな感情で満たされていたのだろうか。

いっぺんにモノがなくなった。——戦中と現代の間に短い期間(昭和20、24年)があるということですね? 岡田:「昭和24年にはかなりモノが出まわるようになったけど、それまでは「モノがない」という点ではいちばんドン底だったな。けど、自給自足は人間の基本や。自分の要るものは自分で調達しなあかん。そういう意識があったら、何をしてもらったって「ありがたい」ってなる。その気持が人間社会を形成しているはずなのに、今、それが無い。

——「買ってやってる」やらしたってる」になってるんですね。岡田:「米を食べるにしたらって、本当なら稲を植えるところから自分でせなあかん。それを代わりに他人がやってくれて、「ありがたい」ってなる。「お前ら、ゼニ払ってるんやから、当たり前やないか」という考えもある。けど、それ、ゼニで言うこと聞いてくれなかつたらどうする? だから、人との縁、一期一会がいかに大事なことか。そういうのが何かのときに出てくる。

文責:若松 司

※1949(昭和24)年6月25日の三度目の食糧管理法改正。

【出典】

図1: SYNDOS「空襲は怖くない。逃げずに火を消せ」——戦時中の「防空法」と情報統制」<http://synodos.jp/politics/13238>(2017年1月8日)
図2: たむたむ「焼夷弾」<http://tamutamun2011.kuronowish.com/Syoudan.htm>(2017年1月8日)



創業 250 余年、経節の老舗 丸与岡田商店

きんこん がこん

ver.1.1

教育に取り組んでいるのは学校だけじゃない!小中高のほかにも地域の教育事業で活躍する団体・施設・仕組みを紹介していきます。

20時間目: ★極勝★ロングウェイアーミー



ボールを投げるのも受けるのもとても上手でした

ゆくとあいに遊びに来ている子どもたちが、長橋小学校のドッジボールサークル活動について楽しそうに話してくれたので、どんな様子なのか興味がありました。早速、覗きに行き、サークル代表の平山成人さんにお話を伺いました。

**子どもたちのために
できることを考えた**

平山さんは、小学2年生の子どもが入学した時から、朝8時から8時30分までなにわ筋と長橋通りの交差点で登校中の子どもたちの安全を見守っておられます。子どもや地域に何かできないだろうかと思案していたところ、平山さんの先輩が指導されていた小学生のドッジボールチームが、全国大会に出場するほど活躍されていることを知りました。ドッジボールは男女混合、わかりやすいルールのために小学生にも参加しやすく、子どもの体力づくりに適した球技であること、

強くなってきてるで!

★極勝★ロングウェイアーミー

また、わからないことがあれば先輩に相談できること、自分の子どもだけでなく地域の子どもとも関わりが持てればいいなあ、というんな好条件が揃っているので、思い切って2015年6月に始めたそうです。

活動は月・水・木の17~19時で、土曜日に活動することもあります。対象は小学生ですが、「小学生が卒業した後にボランティアで来てくれるようになれば」という思いも持たれているようです。部費は今のところ無料ですが、公式の大会に参加する場合にはユニフォームが必要になることもあるので、「将来的には部費も必要になるのでは」ということです。

**負けて泣く姿よりも、
勝って喜ぶ姿を見たい**

初めのうちはボールがコートの半分ぐらいしか届かなかった子どもたちも、練習を重ねると、その距離がどんどん長くなっていきました。また、投げるだけでなく、今では大人が全力で投げたボールも上手に受けることもできます。そう



(左) なにわ筋で子どもを見守る平山さん (右) ドッジボールのルールも勉強しています



して挑んだ大会でしたが、残念ながら勝つことはできませんでした。その時、子どもたちは負けて悔し涙を流しました。その涙をみて、平山さんは、もつと練習して勝って喜ぶ子どもたちの顔が見たいと思ったそうです。そして、さらに練習を重ねて何とか1勝することができ、とても喜んでいました。

**たくさん参加すれば
楽しく強くなれる!**

2月にも大会が控えています。試合に勝つことも大切ですが、仲間と力を合わせるというチーム力の大切さを伝えることや、長橋小学校で大会を開催して地域でドッジボールを盛り上げることなど、やりたいことはたくさんあります。たくさんいる方が楽しく、試合形式の練習もできるので、現在、参加者募集中のこと。みんなもドッジボールしませんか? 学校、学年、男女問わず見学・体験大歓迎!

レポート: 沖田一志
寺嶋公典



[沖田一志] 自宅のネットや携帯の機種変更などでS社の3店舗を巡りました。店員さんも理解しきれないのか、料金プランやオプションの説明が各店舗でバラバラ。料金や割引など複雑すぎです。



多くの参加者に感謝

返していたものの、福祉サービスとつながることで再犯することなく生活できる方が多くおられました。しかし、最近の傾向はすこし変わってきました。アルコールや薬物、性嗜好など、**「依存」**の課題を背景にもち、それが元凶となつて犯罪行為に及んでしまったケースも増え、**「残念ながら再犯におよんでしまう方も増えつつあります。」**これらのケース

よりそいネットではこうした実情を少しでもみなさんに知っていただくこと、**「高齢者犯罪」**をテーマに連続セミナーを開催しています。警察司法の手続きや高齢受刑者の実情などを学ぶ機会には、専門職を中心に200名を超える方に参加いただきました。また、2月9日には、阿倍野区民センターで、ジャーナリストの江川紹子さんとフォーークシンガー

今、チャレンジしていること

すむ予防的なシステムづくりが重要です。

では、支援体制や見守りといった福祉サービスに加え、専門的な治療や認知行動療法などのプログラムが必要で、ただ、こうした社会資源は乏しいのが実情です。他方で、刑務所の中も高齢化が進み、高齢受刑者の割合が1割を占めるようになっています。受刑者が受刑者を介護したり、受刑していることさえも理解していない認知症の受刑者もいます。ただ、窃盗や傷害などの反社会的行動によつてはじめて認知症に気づかれるケースも多く、出所後だけでなく罪を犯さないで済む予防的なシステムづくりが重要です。

の梅原司平さん、当事者家族や福祉関係者の方にも登壇いただき、高齢者と犯罪について五感で感じ考えるシンポジウムも予定しています。塀の中の課題は社会的課題であることを一人でも多くの方に知ってもらうことが、被害者はもちろんのこと加害者を減らすことへの近道だと信じ、様々な活動を行っていますので、これからも応援よろしく願います。

よりそいネットおおさか (大阪地域生活定着支援センター)
〒542-0012 大阪府大阪市中央区谷町7-4-15 大阪府社会福祉会館2階
TEL : 06-6762-8644 FAX : 06-6762-8645
URL : <http://yoriso-osaka.jp/>



2月9日府民セミナー ご案内

『なび』をつくる(株)ナイスは、地域での取り組みも、社会に向けた取り組みもいろいろ。多様につながる実践を紹介していきます。

一般社団法人
VOL.34 よりそいネットおおさか



よりそいネットおおさかは大阪府地域生活定着支援センターを運営しています。センターでは高齢・障がいといった福祉的な支援が必要な刑務所出所者が、出所後も地域で安定した暮らしを送るための住まい提供や福祉サービスなどをコーディネートしています。今回はセンター長の山田さんに日ごろの活動や感じていることを紹介いただきました。

どんな人を支援しているの？

「犯罪者」と聞くとどんなイメージを持ちますか。犯した罪は、殺人や傷害などの重大犯罪？強盗や計画的に大金を盗んだ窃盗？顔つきはやや目が鋭い？やや影のある顔？などなど、「いかにも犯人」というようなイメージを持っていませんか？

福祉現場で相談員として働いていた私が、高齢・障がいなど福祉的支援が必要な犯罪者の支援を始めたのはちょうど6年前です。はじめはどんな方がイメージできず、言葉遣いや接し方さえも迷いながら挑んだ仕事でした。

介護保険の認定を受ける「覚せい剤の売人」だった高齢者、「総菜を抱えたまま店を飛び出した」拒食症の女性、日雇いで仕事にあふれば「賽銭泥棒や住居侵入」を繰り返してきただけの障がい者など、確かに罪は重いのですが、人柄的には福祉現場で接してきた人と同じくらいではありませんでした。むしろ、穏やかで気弱ながらも様々な境遇をなんとか生き抜いてきた人たちという印象を受けました。

それから6年——何が課題？

2006年ごろから刑務所の過剰収容が問題になり、受刑者調査によつて、その実態が明らかにされました。刑務所と社会を行ったり来たりを繰り返す障がい者や高齢者が多く存在し、その大半が社会生活をうまく営めず、軽微な犯罪で受刑中でした。そこで、2009年に厚労省と法務省がタッグを組み、受刑中の高齢者と障がい者を対象に、出所後に安定した社会生活が続けられるよう、福祉や医療につなぐ生活支援が開始されました。それが地域生活定着支援センター事業です。事業が始まったころは、軽微な犯罪を繰り返



(上) 船山先生が語る「塀の中の高齢者」
(下) 辻川先生が語る「高齢者の刑事弁護」



【谷口円】先日、仕事でいわゆる億ションの撮影に行きました。市内のタワーマンション高層階、パブリーな内装に必要以上に広い部屋・良さのわからない私は一生庶民なんだろうなあとしみじみ。



【田岡秀朋】初詣のおみくじが大吉でいい気分。とは言いつつ、神のみ・運まかせとならぬよう、今年こそは人事を尽くしたい。



【飯島照喜】初詣はスルーし、「商売繁盛、笹もってこい」と今宵戎へ。年初から現実的な事業への旅立ちへの願掛けが始まった。



今月の花:ユリオプスデージー

花言葉:「明るい愛」「円満な関係」「夫婦円満」

ギリシャ語の「大きな目を持つ」という意味で1970年代にアメリカから輸入されたものです。茎が木質化するので低木になります。



寒い日続きます。8年前から毎月お花を買って来ていた沖縄出身のおじさんが、3年ぶりくらいに買いに来てくれました。顔を見ないなあと思ってた矢先にきてくれました。少し痩せて、やつれていました。入院を繰り返していたようで、顔を見られてうれしかったです。でもまだ、お酒を片手に持っていました。「お酒あかんで」と言ったら、素直に「はい」と答えてくれたけど、やめられへんねんやろーな・・・ (なんばひとみ)

hidarimaki

ぼの細道



初春のニューイヤークンサーは、ウィーン・フィルの衛星放送と、ウィーン・フォルクスオーパーのライブ演奏でした。ともにトリーはラデツキー行進曲で盛り上がりました。

オアフから安芸への道断つ漱石忌

足ぶみで缶踏みつぶす朝時雨

パトカー発進に逃げる同色の鶴鶴

冬あわれ微動歩行で耐える蜘蛛

枯葉踏み二輪シャリシャリ進まない

新春の取りは將軍ラデツキー

い湯かげん

他者を思いやる想像力で、新しい年を生きる

過ぐる2016年を概観して
思い浮かべたのは、「空に消えて
いった打ち上げ花火」という歌
詞だった。

障害者差別解消法は「合理的配
慮」を明記した画期的(花火のよ
う)な法律だったが、その後の盛
り上がりには欠けた。軽介護を介
保険から地域事業に変えるとい
うのは、賛否はともかく転換にな
ると思ったが、尻すぼんだ。生活
困窮者支援も期待通りには広が
らず、何だか「こども食堂」へと
目移りした感がある。唐突だが、
米国の女性大統領誕生かと思
われたが、失速したし、わが国で
も「民進党」と党名を変え、蓮舫
という女性党首を迎えたのに、空

回りした。ヘイト法や部落差別
解消法が成立し、LGBT法やフ
リースクール法等も俎上に載っ
たが、突破力のある政治家やリ
ダーは見えなかった。鹿児島とく
に新潟知事選では原発が争点化
し、少なくとも連合という労働団
体は紛糾すると思ったが、そうで
もない。橋下さんが口火を切り、
各党も同調した教育の無償化も
一気に財源論にまで踏みこむの
かと思われたが、打ち上げ花火の
如くだった。
もちろん、何事も一朝一夕に行
くものではなく、新しい年に引き
継がれていくとは思うのだが、こ
の消化不良感は一切何だろうか?
一つは、万事に当事者感が薄い

気がする。口幅つたいが、米国の
女性たちは選挙戦略を見誤った
のではないだろうか? 与党とい
うか、自民党というのは、世論を
取り込んでしまう癖がある。やつ
ぱり、時に意固地なほどの当事者
運動を野党が掘り起こすことが、
法律(心)に魂を吹き込むのだろう。
沖縄の反基地運動は、いかにも対
照的だ。生活困窮者支援も支援員
が当事者を代行しすぎる気がす
る。自治体も分権の前に、分散し
がちになっているのかもしれない。
もう一つは、他者を自分に置き
換えてみる想像力が欠けている
気がする。「合理的配慮」も障害
者だけとみると、「配慮」という上
から目線が気になるが、これを多
様な人々の権利に広げて考える
と、「気配り」という水平になる。
原発で働く人や家族とその労働
組合が葛藤するのは当たり前で、
「連合は墮落した」なんて言わず
に、民主主義に良い方途はないも
のかと、一緒に模索することが有
意義ではないかと思う。
政策に当事者性を持たせるこ


株ナイス代表取締役
富田一幸
人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

とと、他者を自分に置き換えてみ
る想像力、その顕著な営みを「政
治」と言い、それは文学にも似て
いる、ボクはそう思ってきた。つ
まり、政治が不在な分、文学がな
いと同じように無味乾燥なのだ。
蓮舫さんは、二重国籍問題で出鼻
を挫かれた感があるが、与党vs
野党を超えた女性という目線で、
すべての政策を問い直したら良い。
沖縄とそれ以外、障害者とそうで
ない人、原発と生活者、権力とは
少し違う自治体という存在も、そ
うした想像力によって、硬直を打
破したいものだ。そんな徒然の感
慨を、遅ればせの新年の抱負とし
たい。


[若松司] ユーモアがほしいのは、相手や対象と
適度な距離をつくりたいから、より広い視野から
見つめ直すスタンスをとりたいたいからなんじやない
か、とふと思った。うまく言えないね。


[西田吉志] 最近、普段することのないアプリの
ゲームをしている。こども達に何回勝負しても勝
てない将棋のゲーム。オセロや五目並べは勝ち方
がわかるのに将棋だけが本当にわからない。

たぐの 3くほつたま
6 2
豊 間

昨年末は高野山に登頂。山深さも
相まって「神々がいる感じ」
が凄い。優しさにも触れられた。
ただ冬に自転車で行く所ではない。
登っている時は気付かない
マイナス気温の世界。(安田拓也)

肩までゆっくり浸かれるあつ〜い湯が恋しくなるこの季節。
「まちを歩けば、銭湯にあたる」とは行かないまでも、
まだまだ銭湯文化が残るまちの一角、アパートの一室6畳2間。
いらっしゃいませ。今日は空いてるしゆっくり入ってっね。
いつもおそまでお疲れさま。
あれ、今日は娘さんは一緒じゃないの。
おとうさん先ではったよ。
最近のテレビはあれやな〜。風邪ひかんように帰って。
銭湯が「当たり前」から「特別」になったのはいつ頃だろう。
どちらにしても、入浴券やお金をその都度受け渡し、
先客との妙な距離感を探りながらも、つかるお湯。
しばらくして心地よく、番のおばちゃんに挨拶をして、
少し冷えた夜道ぶらりと帰る。そんなひとときはきっと特別だ。
今日も自然と「ありがとう」が言いたくなる。そんなじかん。

せんとう

なび2月号 (vol.1,120)
発行日:2017年2月1日(創刊日:2007年1月1日)
発行:株式会社ナイス
発行人:代表取締役 富田一幸

住所:大阪市西成区長橋3-6-33
電話:06-6563-1156
E-mail:info@nice.ne.jp
url:http://www.nice.ne.jp/

編集長:寺嶋公典
編集:飯島照章、沖田一志、佐々木敬明、田岡秀朋、西田吉志、安田拓也、若松司(あいうえお順)
イラスト:hidarimaki デザイン:谷口円

にっしゅ 飯ユラ

メシ

11 軒目

『焼とんたゆたゆ
天下茶屋本店』



赤ちょうちん、のれん、看板、庇には酒瓶、いかにも「料理と酒に誘われる」といった風情のある外観。店内に入ると、正面のエル字型カウンター角に大腸、胃袋など数種類の豚モツを煮込んだモツ煮込み鍋。そして、「いらっしゃい」の威勢の良い声、備長炭で焼きあげる焼とんの紫煙…。五感への訴え、共鳴するように胃袋が強く刺激され、自ずと注文してしまう。

まずは、「名物モツ煮込み」。「豚モツを5時間以上じっくり煮込んだ」(スタッフの高田象太さん)というだけに、凝縮された豚の旨味が口の中に広がっていく、煮込みにはバゲットが添えられており、汁につけて食べると、またこれがうまい、「意外だ」。次は「つくね」。卵黄とタレを絡ませて食すると、卵黄の甘味とタレのコクが、口の中であっさりとしたつくねと微妙に絡まり、何とも言えない「美味だ」。

続いて、たゆたゆ必食といわれている「豚のとる火刺盛り(豚ヒレ、ガツ(胃)、ハツ(心))」を。豚ヒレはしっとりなめらか、牛でいうミノの部分にあたるガツ、独特の食感が楽しめるハツ、豚の部位それぞれ

ミシュランならぬ「飯ユラ」。匿名でなく飯島(だから飯(メシ)ユラ)が「店主がおもしろい」、「店の客が楽しい」、「料理が、味がおいしい」の3つの「い」を基準に、西成区内の飲食店などを紹介します。

の食感と旨味が楽しめる。焼とんは、串から抜かず食べるのが心得。1本の中で、肉の形状による食感のバランスを考慮したり、さらに抜いてしまうとおいしい肉汁が流出するため。「こうおいしいと酒が飲みたくなる」。焼酎が売りだが、「あまり出回っていない地酒を集めている」(高田さん)というので酒を注文。燗で焼とんを賞味、これがいけた。

「たゆたゆ」は2003年(平成15年)現在地で開業。「牛高豚低」の大阪において豚モツの知名度は皆無な頃だった。関西ではカレーや肉じゃがといえは「牛肉」、ところが関東では「豚肉」と、関西と関東では肉文化に大きな違いがある。開業から14年目の現在、豚モツの価値を一層あげ、大阪の新しい食文化「大阪焼とん」を牽引している。

焼とん たゆたゆ 天下茶屋本店

場所:西成区天下茶屋3-23-22(地下鉄堺筋線天下茶屋駅すぐ)
電話:06-6659-1201
営業時間:17:00~24:00



あとがき

隣保館で事業を開始して1年が過ぎたが、この1年は特に早く過ぎたように感じた。地域に関係する仕事をさせてもらって24年になるが、仮に65歳を定年としても残り22年で、もう折り返し地点を過ぎていく。そう考えると残された時間はそんなになく、今まで自分はどんな仕事をしてきたのかな?とも思った。世の中の人は普通に考えていることかもしれないが、こんなことを考えるようになったのは、成長し続けているんだと自分に言い聞かせた。(寺嶋)